

第三回新たな最先端教育プログラム開発検討委員会 記録

1. 日時

令和 5 年 11 月 24 日(金)

午後 9 時30分から 11 時 30 分まで

※一部オンライン参加

2. 出席者

学識経験者 ※敬称略

五十棲 浩二（経済産業省商務・サービスグループ
サービス政策課 教育産業室長）

川越 至桜（東京大学生産技術研究所 准教授）

島田 久仁彦（株式会社 KS International
Strategies 代表取締役社長 元国連国際紛争調停官）

野中 繁（武蔵野大学 講師）

登本洋子（東京学芸大学 先端教育人材育成推進機
構 准教授）

藤田 保（上智大学言語教育研究センター教授 セン
ター長）

増田正弘（東京学芸大学 教職大学院教授）

教育委員会

山本 真（千代田区教育委員会指導課長）

学校

野村 公郎 千代田区立九段中等教育学校 統括校長

島田 功一郎 千代田区立九段中等教育学校 前期課
程 副校長

林 倫道 千代田区立九段中等教育学校 後期課程
副校長

<事務局>

前田 徹 主幹教諭 CNV 室長

青柳 厚輝 教諭

直井 良太 教諭

矢野 絢奈 教諭

塚田 恭平 千代田区教育委員会指導主事

3. 協議

(1) 取組内容

(2) 組織体制や評価等

(3) その他

4. 指導助言の要旨

- ポンチ絵に関して、説明が非常に分かりやすく、前回からの進化が感じられる。特に生徒に問いを作らせ、反復する学びを通じて失敗の機会を提供するプロセスが良く練られている。また、教員も積極的にセミナーに参加し、自身の関心を追求するという方針が良いと感じた。
- ポンチ絵の 3D 表現とスパイラルが進化し、分かりやすくなった。最後の矢印はもっと広がりを持ち、上向きになるとまとまりが良い。急激な上昇よりも、しっかりと広がりながら向上する方が好ましい。総じて、絵はすっきりとし改善している。
- 分類マップによって、教科学習以外の要素や学外研修がお互いを補完し合っている構造が明確になった。余白には学外の要素との連携が示唆され、各教科が独立していないことや校外学習が学内の学びとリンクしていることが見て取れ、全体像がより総合的になった。
- 学校教育の基盤は各教科の学習であり、横断的なアプローチの実践は困難だが、総合学習を通じて各教科の連携を強調するコンセプトは重視したい。例えば、世界史と数学における連携など、科目の垣根を超えて学びが結びつくことが STEAM 教育において重要である。
- 前回から今回にかけて、計画が実現可能な形で進展し、6 年間の学びの進行が明確になった。開発プログラムでは STEAM 人材育成、グローバルマインド、アントレプレナーシップの 3 軸によって、学びが効果的に結びつけられている。
- 前期後期課程 6 年間を通じて総合的な学習・探究の時間を設け、研修を通じて理念を伝え、新しい視点を加味しながら従来のやり方にとらわれず進

- めていきたい。担当分掌はもちろん、実際に授業で生徒に接する担任や教科担当者も含めて、現行の指導も生かして柔軟かつ革新的なアプローチを全校的に実施していきたい。
- コロナ収束後、3学年生徒がオーストラリアでホームステイし、STEM 教育が活発な学校を訪れたり、5学年生徒がシンガポールで企業訪問したりすることにより、研究環境や国際的なビジネスに触れたりした。こうして他国から学ぶのはもちろん重要だが、それ以上に自国について理解することも大切である。現段階でも「千代田楽」を実施しているが、例えば平和教育としての広島や長崎への訪問など、海外に行ったときに日本のことを聞かれたときのためにも、もっと自分たちの国についてしっかり知る必要がある。
 - 教科の繋がりと同様に、日本も世界の一部として意識することが必要。また、海外では同世代との交流が何より重要で、お互いに同じ目線で話し合える経験が生徒にとって大きな刺激になる。単なる教わりだけでなく、対等な立場での対話も重視すべき。
 - 海外で、現地の学生と同じ課題に対して、異なる視点からアプローチすることが学びの刺激となる。また、企業や学校など外部との関わりにおいても、相互のメリットを考え、共感を生むコミュニケーションが大切。同様に、教育プログラムも生徒・企業双方の視点を考慮し、千代田区や外部の受け入れ先にとってのメリットを見出すことが必要。
 - 千代田区では小学3年生から「千代田楽」として学習プログラムを導入。「千代田楽」を通じて学んだことを、各学校の生徒が学年を問わず発表し合う取り組みを実施している。さらに、小笠原村と連携協定を結び、中学生の行き来を考えている。地域、国内、世界の視点を持ち、それぞれを行き来していく学習が大切である。
 - 海外研修では大学生とのディスカッション等も良いが、同年代の高校生同士でのワークショップも効果的である。アジアサイエンスキャンプなどで見られたように、異なる国の高校生同士が協働して課題解決に取り組むことで得るものは大きい。また、日本の文化や歴史を知ること重要で、海外で意外な質問に答える経験から、異なる視点で日本を再評価できる。
 - 過去10年で、首都圏の大学生が増加し、地方との交流が減少している。地域の大学に進学することは悪いことではないが、交流の幅が狭まっているのは課題である。
 - 海外でのディスカッションやプレゼンでも、相手に日本の話を紹介するだけでなく、共同の課題に取り組む形で国際的なチームを組むとよい。共同の実験やプロジェクトを通じて国際的な仲間意識を育む。
 - スウェーデンやフランスでは、日本のアニメが「かわいい」コンセプトでマルチカルチャー的に受け入れられている。スウェーデンでは大使館主催のイベントで、日本のアニメソングをコスプレして歌うコンテストがある。「キュート」「プリティ」「かわいい」など、似た意味をもつ表現について、異なる視点で考えを共有することが大事だと感じた。
 - 突然のシャッフルで組まれたグループが同じ課題に取り組む機会があるとよい。今はzoomなどの媒体で海外の生徒相手であっても簡単にできる。このような活動を通じて、異なる意見やアイデアの交流が促進され、刺激的な経験が得られる。
 - 外国の子供たちは自国についてよく知っているが、日本の子供たち、特に東京の生徒は視野が狭く、現実の課題に対しての意識が薄いことがある。九段では1学年での千代田区のフィールドワークから始めるように、地域から他の地域、そして世界へと段階的に視野を広げるアプローチが必要である。
 - 特に地方へのプログラムについて、全員で行くのではなく、課題を持つ生徒が自らの探究と関連付け、地方の課題を探るアプローチが効果的なのでは。海外プログラムも選択肢を提供し、学生が自らのビジョンで選択できる環境をつくるべきである。難しいかもしれないが、学校は生徒と保護者に対して「ここに行きますからお金をください」ではなく、生徒が自分たちで必要性を理解し、自分たちのビジョンに基づいて選択できるような仕組みをつくれると非常に良い。
 - グローバルな視点は魅力的だが、プログラムには断片的な側面もある。海外研修の拡充に関して、複数の国と連携することで、個別な研修にとどまることなく、広がりの可能性が残る。これにより、今後の展開が計画しやすくなる。

- 新たなプログラムを実践するにあたって、初期の勢いだけでなく長期的な継続性を確保するのが大事。その年ごとに、社会や状況の変化に柔軟に対応し、経験を元に修正を行うことが不可欠。主となる担当教員の牽引力も重要だが、一部のみでなく全体で取り組むために共通認識を醸成したり、クラウドを活用して情報共有を強化する仕組みを整えたりすることも同時に必要。また、普段の教科でも、プログラム全体の理念を反映していけるとよい。
- 文理融合の考え方において、今の時代は、特に AI、ヒトゲノムなどの分野で、科学者にこそ倫理性が強く求められる。倫理や哲学もプログラムに組み込んでいけるとよい。
- 倫理は重要で、近頃は人が指示を出さずとも、情報を解析して自動的に作動するシステムが開発されており、若い世代はこうしたものに将来関与する可能性が高い。技術進化による利益と、AI との付き合い方を模索する必要がある、これは永遠に解決されることのない問題でもある。
- 各科目で人権教育が重要となっている。先生方がこれを指導の中で少しでも意識できれば生徒への影響が期待できる。大学生に対する人権教育では、問題に気付かない学生もいれば、深く考える学生もいて、その双方が対話することにより新たな気づきや変容が生まれた。
- 評価は重要だが、まずは目標が定まった段階でどのポイントを重視するかを決めるのが大事である。生徒が伸びるために行うのが評価であるため、生徒自身に対していかにフィードバックするかに重点を置くべき。
- 文理融合において、「総合知」を意識した総合的な学習を促進するべき。また、組織体制においては計画書に適切に明示する必要があり、特に担任外との連携、運営委員会との関係を検討しておく必要がある。生徒のオーナーシップを育むため、生徒が新プログラムの企画に積極的に参加できる仕組みを模索していけるとよい。千代田区や九段周辺の保護者や地域の人材も活かしたい。また、生徒が交流できる憩いの場所を整えることで、より活発な学びの環境になるのではないかな。
- 組織的には CNV を広げ、より幅広い教員が関与する委員会組織を構築する必要がある。どこでも協議ができる環境を整え、移動型のホワイトボード

やぐつろげるスペースを活用し、生徒や教員がアイデアを共有できる場を提供したい。文理融合を促進し、従来のように特に理数分野を理科教員が担当する、というよりは、総合的な探究を教員全体で進めるように調整していきたい。